

史料紹介

宗安寺蔵

『宝曆十三末年 朝鮮人御馳走

御用御入用積作事方萬仕様帳』

竹内真道

## 一、朝鮮通信使と彦根宗安寺

江戸時代、徳川幕府は、豊臣秀吉の侵略以来断絶していた朝鮮との国交を修復するため、李朝鮮に通信使の派遣を要請した。これに答えて朝鮮は、一六〇七年（慶長十二年）の第一回から、一六二四年（寛永元年）の第三回まで、秀吉によって日本に連れ去られた俘虜を調査して朝鮮へ戻す「回答兼刷還使」を、一六三六年（寛永十三年）の第四回より、最後の一八一一年（文化八年）の第十二回まで、信を通わす交隣目的の「通信使」を派遣した。

通信使一行は、総勢三百名から五百名にのぼり、対馬の宗氏の同行で船で壱岐を経て、筑前の藍島から赤間関（下関）を通り、瀬戸内海に入る。瀬戸内の海路は、西国大名が船で警護し、大坂の河口で川船に乗りかえ、大坂に入る。ただし、一部は河口に停泊の朝鮮の船に残り、一行の帰りを待つ。大坂からは、再び川舟で進み、淀浦に上陸して京都へ行く。京よりは大阪を経、琵琶湖畔の浜街道を通り、彦根に泊まる。不破関、今須を通り大垣で泊、洲俣を経て名古屋に行く。名古屋からは東海道を

下り、江戸へと向かうのである。

最後となる文化八年の通信使は、財政上の負担が重いため、対馬で聘礼が行なわれ、国書の交換がなされた。<sup>①</sup>

なお、日本からの使節は、釜山までしか入れず、内陸部への通行は禁止された。秀吉の侵略以来の警戒心から、国内探情を防止するためである。<sup>②</sup>

さて、通信使一行のうち、主に上官の彦根での宿泊には、宗安寺が定められていた。

この宗安寺は、寺伝によると、もと井伊直政の城下、群馬県の高崎にあったのだが、関ヶ原の戦いの後、直政が彦根初代藩主に封ぜられた時、高崎より移った寺で、二代藩主直孝により城下町が形成された慶長八年（一六〇三年）、現在地に建てられた。城下町の中心となった本町より、京橋通りを南へ百メートルほど行った所にあり、寺域約三千坪、城下町の中では大寺である。浄土宗百万遍知恩寺の末寺で、江戸時代は、彦根藩における徳川家康の位牌奉安所であった。また、城下町の中央に位置することから、藩士たちの会合にも使われたようである。<sup>③</sup>

この宗安寺に通信使が宿泊したのは『海游録』<sup>⑤</sup>などにみられるが、従来、宗安寺で通信使に關係あるもので今に残るは、李朝高官の肖像画の軸一幅と、接待の時の勝手口に使われたという黒門の、二点だけとされていた。しかし、最近、『宝曆十三末年 朝鮮人御馳走御用御入用積作事方萬仕様帳』と題する冊子が発見されたのである。

## 二、『宝曆十三末年 朝鮮人御馳走御用御入用積作事方萬仕様帳』について

### 積作事方萬仕様帳』について

この『宝曆十三末年 朝鮮人御馳走御用御入用積作事方萬仕様帳』(以下『仕様帳』と略す)は、

袋綴冊子、二ヶ所こより綴、十九丁表紙とも紙

縦 二十四・五センチ

横 十七・五センチ

一冊

で、その内容は、前半〔82〕頁までが、〔82〕頁に、

右者寛延元辰年朝鮮人来聘御馳走御用ニ付御作事方御

### 修覆仕様萬書記奉渡上候以上

とあることから、寛延元年(一七四八年)<sup>⑥</sup>に来日した通信使一行の、彦根での宿泊に際してなされた、宿館の修覆や準備の仕方等を、記したものである。表紙に「宝曆十三末年」とあるから、宝曆十四年(一七六四年)が通信使来聘の年であるので、その前年に、前回寛延元年の通信使宿泊準備の仕様を、参考のため書き記したのである。

次に、〔84〕頁から〔92〕頁五行目までは、「覚」と始めにあることから、前回寛延元年の通信使一行宿泊の準備にかかった費用が記されていると考えられる。ただし、この費用の合計は、〔92〕頁の「七拾九貫八百七拾六匁四分」であるが、その内訳が、〔84〕頁から〔88〕頁十一行目までと、〔88〕頁十二行目から〔90〕頁三行目まで、及び、〔90〕頁四行目から〔92〕頁五行目までの、三通りに書かれている。

次に、〔92〕頁六行目から最後までは、始めに「萬御入用大積」とあることから、来る宝曆十四年の通信使一行の宿泊準備にかかる費用の、見積りである。ただし、こ

ここには三使宿の宗安寺の分が記されていない。

この『仕様帳』が見つかったことにより、通信使一行の、彦根宿泊のための準備の様子がわかる。

まず、寛延元年の彦根宿泊では、

三使旅館 宗安寺

中官宿 大信寺

下官宿 明性寺

官人荷物宿 蓮華寺

長老宿 江国寺

長老宿 下宿 善照寺・松原庄右衛門

通詞下知役宿 上魚屋町八右衛門・同町久左衛門

通詞宿 願通寺・法藏寺・理応院・白壁町源右衛門・

同町伝次・紺屋町伝介・元川町弥次兵衛・上魚屋町

九兵衛・職人町伝兵衛・下魚屋町角田半四郎・本町

磯部三郎兵衛

対馬守本陣 林吉兵衛

が、主な官人役人の宿泊所であり、さらには町方惣下宿数百二十六軒、対馬藩一行の仮馬屋五十一ヶ所（72頁の

内訳から、馬は六十四頭来たことになる）、代官と手代の宿八軒、与力宿二軒、使者宿四軒とあり、宗安寺を中心に、その近辺の寺院、武家屋敷、町人屋敷に、通信使一行、及び、同行の対馬藩一行らが分宿したことがわかる。

彦根の城下町は、三重の堀と芹川に囲まれ、内堀内には彦根城天守と藩主の表御殿、内堀と中堀の間には五百石以上の家老重臣の屋敷、中堀と外堀の間には百石以上の中級武士及び町人屋敷と寺院、外堀と芹川の間には五十石以上の武士、足輕及び町人屋敷と寺院、というふうに分けられていた。<sup>⑧</sup>通信使一行は、このうち、中堀と外堀の間、中級武士及び町人屋敷と寺院のある所に、主に宿泊したようである。

寛延元年、大坂残留を除いた通信使一行の数は三百九十二名、これに対馬藩一行も同行するのであるから、彦根城下のこの中堀と外堀の間にある寺院や主な屋敷は、ほとんど宿泊に利用されたと思われる。武家だけでなく町人を含めての、まさに城下町あげての応接であった。

次に、準備にかかった費用は、七十九貫八百七十六匁

四分。これを両に直すと、約千三百三十一両。<sup>⑧</sup> 一番多く

使われたのは、三使旅館の宗安寺で、二十一貫七百五十四匁九分である。他に目立つのは、橋の懸替えに、二十貫九百八十五匁四分が使われている。彦根宿泊だけでこれだけかかるのであるから（しかもこれには、当日の御馳走代、調度品代等は含まれていない）、大坂から江戸まで、通信使一行の往復には、相当な費用がかかったといえる。

〔92〕頁からの、宝暦十四年来日、通信使一行宿泊準備の見積りでは、中官宿が二ヶ寺になったりして、前回寛延元年の時より、さらに費用がふえている。

最後に、この『仕様帳』の中の語彙をいくつか説明しておく。

〔48〕頁 三使——正使・副使・従事官の三使。<sup>⑨</sup>

〔48〕頁 書翰輿——朝鮮国王よりの国書をのせた輿。

〔48〕頁 補理——補い修理すること。

〔48〕頁 フェツ——おのとまさかりのことで、『新編大言

海』には、「軋ジテ、昔、征伐ニ赴ク大将ニ、賜ハリタル武器。」とある。『仕様帳』には「鉾鉞」

と書かれているが、これは「鉄鉞」の誤りであるため、横に仮名で「フェツ」と記されているのであろう。

〔50〕頁 押物判事——輸送担当官のことか。<sup>⑩</sup>

〔52〕頁 慶昌庵——宗安寺塔頭。

〔52〕頁 運光庵——宗安寺塔頭。

〔56〕頁 仙寿庵——宗安寺塔頭。

〔56〕頁 行心庵——宗安寺塔頭。

〔56〕頁 鷹——朝鮮より日本へ贈られた鷹。

〔86〕頁 摺針茶や——仲仙道摺針峠の茶屋。

#### 〔謝辞〕

『仕様帳』を読むにあたり、元京都府立総合資料館古文書課資料主任 橋本初子先生、元京都府立鴨沂高校定時制教諭 大槻幹郎先生、佛教大学 福原隆善先生、佛教大学 松永知海先生、及び京都上善寺古文書の会の方々に色々御指摘頂き、特に、橋本先生には、多くの御教示を受けた。また、佛教大学仏教文化研究所所長 坪井

俊映先生、同運営委員 深貝慈孝先生、同助手 笹田教彰先生には、一地方寺院の史料にもかかわらず、本書への掲載をお許し下さった。

ここに深く感謝申し上げます。

## 註

。本文中( )頁としてあるのは、『仕様帳』原本写真の掲載しである本書の頁数を指す。

。註にある文献の著者名等は、最後の参考文献を参照されたい。

- ① 以上のことは、『日本と朝鮮』二〇四頁～二〇九頁・二一九頁～二二八頁・二三三頁～二三四頁、『日韓文化交流史の研究』二七頁～二八頁・七八頁～七九頁・八三頁～八五頁に詳しい。
- ② 『海游録 朝鮮通信使の日本紀行』解説三三二頁～三三三頁。
- ③ 彦根に移って初めは、石田三成の居城のあった佐和山麓にあった。
- ④ 幕末、大政奉還に当って、足輕級の藩士たちは宗安寺に集まって協議したことが『彦根市史 下冊』一八頁に載っている。
- ⑤ 『海游録 朝鮮通信使の日本紀行』一四九頁～一五〇頁。

⑥ 朝鮮使節の往来(江戸時代)の年、人員等については、『日本と朝鮮』二二二頁、『海游録 朝鮮通信使の日本紀行』解説三三二頁に表がある。

⑦ 『彦根市史 上冊』四〇一頁。

⑧ 元禄十三年(一七〇〇年)の幕府公定相場金一両＝銀六十匁で計算。

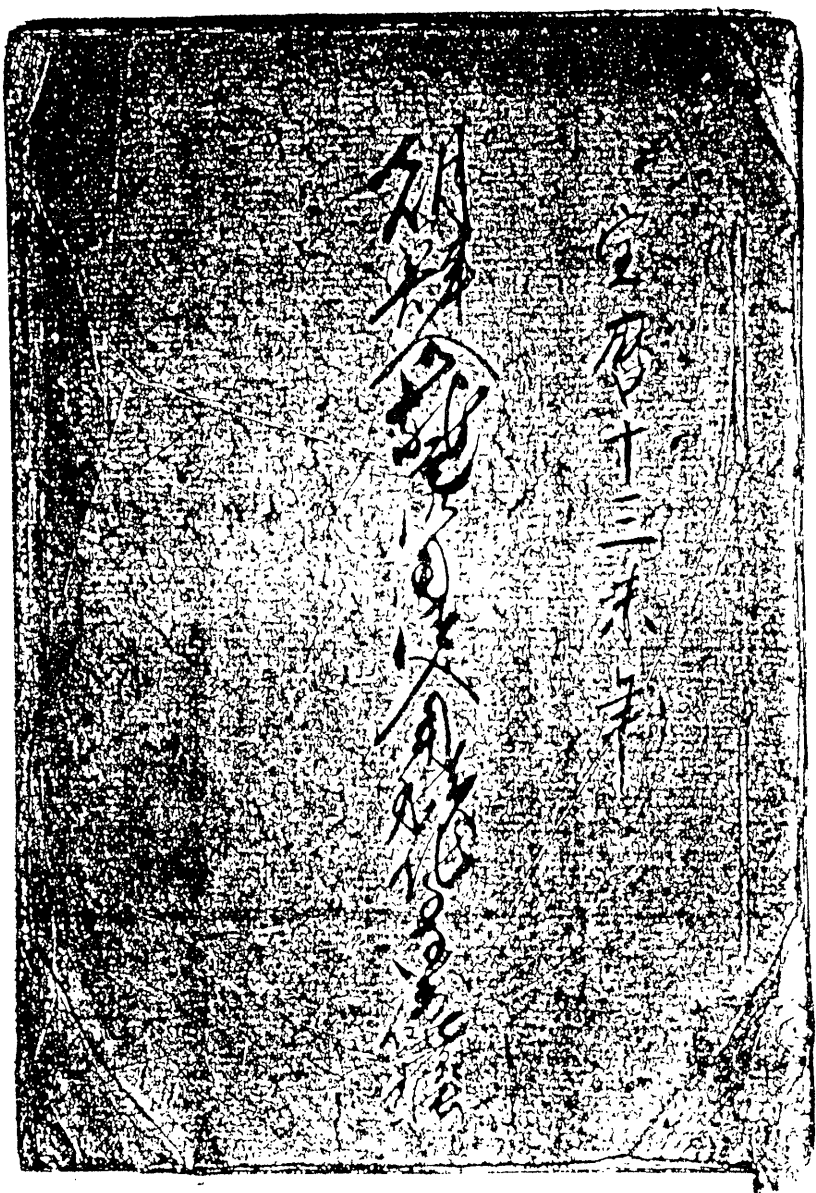
⑨ 通信使の構成については『日本と朝鮮』二二二頁～二三三頁に詳しい。

⑩ 『新編 大言海』一七七二頁C。

⑪ 『日本と朝鮮』二三三頁に、朝鮮使節の中に輸送担当の通訳として、押物通事があるのが載せられている。

## 参考文献

- 『日本と朝鮮』中村栄孝著 昭和四十一年至文堂発行  
『日韓文化交流史の研究』芳賀登著 一九八六年 雄山閣出版 発行
- 『海游録 朝鮮通信使の日本紀行』申維翰著 姜在彦訳注 東洋文庫二五二 一九七四年 平凡社発行
- 『彦根市史 上冊・中冊・下冊』中村直勝編集(初版昭和三十年) 五年(三十九年発行) 復刻版昭和六十二年博文堂発行
- 『新編 大言海』大槻文彦・大槻清彦著 昭和五十七年富山房 発行



宝曆 十三末年 二七六三

朝鮮人御馳走御用御入用積作事方萬仕様帳





三使旅館

宗安寺

書翰輿置所 老間梁ニ桁行老丈 老尺同取付廊下  
老間四方共先年之通出来仕候處此度ハ書簡式通ニ  
相成申候儀ニ付右廊下ヲ輿置所ニ補理輿入違ニ居  
置台式ツ同所番所老ケ所建

式ツ書簡台 長三尺五寸横三尺高七寸  
但先年之通正使之間床ニ居置前ニ緞子御幕張り

三使台式間半梁ニ桁行拾三間半ニ建但三仕切  
同通道竹縁中老間ニ拾式間半屋年懸セウセウ  
同三使書院江之廊下三ヶ所並物置三ヶ所共建

同所釜や式間ニ三間西隣沢村角弥屋敷ニ建

正使副使居間之庭ニフエツ式本建老ケ所  
宛建

鉾鉞  
〔鉄鉞〕



一 同所台所附官人惣湯殿壺ヶ所同三軒雪隠建

一 本堂南縁之間佛壇取の希廻り屏風囲同壺分  
木綿紺御幕ニ而仕切壺官居所ニ補理同湯殿雪隠建

一 同所統束之間を右同段ニ囲上判事押物判事  
次上判事居所ニ補理同湯殿雪隠建

一 本堂仏前三方唐紙屏風ニ而囲同上明キ其分木綿  
紺幕ニ而仕切対府御役人衆詰所ニ成

一 同所玄関より取付之所ふ多満屏風ニ而仕切通詞  
下知役並通詞詰所補理同本堂と玄関と間ニ  
雪隠壺ヶ所建

一 書院上官護衛軍官居所同統キ良医医員  
次官共居所ニ方丈中之間次之間共補理同所南之  
方湯殿壺ヶ所同統キ式軒雪隠同西之方ニ三軒之  
雪隠右同段

一 方丈中自天任知小童居亦如日月湯火之  
以物名限去補理  
一 上宮居上宮上列事如理而庫表之內之七  
下周曰亦云云云云修發信信信信信信信  
而神理  
一 月亦細亦如風風亦云云信信信信信信信  
信信信信信信  
一 以信信信信信信信信信信信信信信信  
信信信信信信信信信信信信信信信  
一 信人通身是信信信信信信信信信信信  
信信信信信信信信信信信信信信信  
一 信信信信信信信信信信信信信信信  
信信信信信信信信信信信信信信信  
一 庫表信信信信信信信信信信信信信信信

一 方丈西之間、壺仕切小童居所ニ成申ニ付湯殿一ヶ所  
式軒雪隠共補理

一 壺官上官上判事料理所庫裏之内三仕切  
戸、同所六間之所、仮床仕御膳方膳部仕立  
所々補理

一 同所納所部屋風呂や共住居置御膳方膳部  
仕立所右同段

一 御膳方料理所魚屋町庄次郎所補理同所より  
膳部仕立所へ仮廊下とも

一 官人道具立慶昌庵前運光庵前、兩輪ニ  
長三間ツ、立其外御拝両様高欄ヲ用ひ三使  
着後本堂東縁輪鴨為上籠槍懸格上置

一 庫裏登方物置、壺間半ニ桁行八間之所下行方

[illegible]

物置ニ補理同所より台所へ廊下式ケ所同西之方ニ式軒  
雪隠建

一 明性寺へぬけ道沢村角弥屋敷之内高堀道巾取  
のけ同柵門並番所壺ケ所同東之方三使湯殿  
番所壺ケ所建

一 本堂御拝登り橋同縁板之上共疊表押木釘打

一 衆寮仏檀取のけ三使輿部やニ補理同所廊下  
之内番所ニ補理

一 鐘突堂廻り辱ニ而包

一 繻掛老間半ニ三間男部やヲ補理同所より庫裏  
まで仕切柵門立同玄関前番所壺ケ所建

一 同所より魚屋町へぬけ道明ケ申ニ付町や内住居片  
付柵門立表飯番所建同西之方明地御賄方  
食焼釜や老間半ニ五間同付出致し同続き  
湯釜や八尺ニ四間とも立





一 慶昌庵所製述官書記御馳走所ニ付仏檀  
飯困座敷前湯殿同下式軒雪隠立料理所  
竹縁いろ里共付

一 仙寿庵所写字官尽員御馳走所ニ付仏檀  
飯かこひ座敷湯殿雪隠同下式軒雪隠料理  
所竹縁いろ里とも付御鷹止宿之節御馳走所  
にも成

一 行心庵所御鷹止宿之節御鷹匠餌打宿  
三使来聘帰国之節ハ対馬守様御供休息所ニ  
付佛壇前飯かこひ座敷湯殿立いろ里補理

一 運光庵所対馬守様御休息所ニ付上雪隠統  
同所東之方御勘定所江之新道付申ニ付東輪  
庇同裏物置共取疊並鎮守小宮取除御勘定所  
堀飯番所建



一 表門番所壹間半二四間半壹ヶ所建御紋付御まく張り

一 本堂正面並塔頭四ヶ所共御紋付御幕張其外所々二紺幕張かや釣り執折釘打横竹入釜懸之折釘所々二打

一 塔頭四ヶ所前高塀取片付井戸式ヶ所中埋仕所々水屋ふ多竹寿のこ仕

一 御勘定所会所ヲ献上御鷹置所ニ補理同西之方餌作所竹縁壹ヶ所付但御鷹籠載せ申台ハ御茶壺台御有物を用ひ申候

一 献上之御鷹九足立御勘定所表長や之内補理同統き東三方式間四方之所御馬取居所ニ補理御馬屋前紺幕張り

一 同所五足立外懸立同釜や式間二四間替札方



一  
会所ヲ補理同続北之方式間四方飼葉置  
所ニ補理番所式ケ所立

一  
三使来聘帰国之節ハ御勘定所御筋方之  
会所共三使荷物置所並荷物附官人  
御馳走ニ罷成候ニ付底式間ニ三間之所補理  
いろ里付飯湯殿壺ケ所同雪隠所々ニ建付  
献上御馬や取片付乗物置所ニ補理

一  
同所会所献上御長持置所並御返物御長持  
置所ニも相成申候

### 中官宿

### 大信寺

一  
本堂仏前仮囲ひ唐紙立壺分木綿紺まく  
はり所々ニ釜懸之竹取付青亭之繩所々ニ付  
同かや釣り折釘打所々横竹取付同縁側向拝  
御紋付御幕壺張り



一 同所西之方惣湯殿壺ヶ所立但三仕切壺間半ツ、同前ゆか多場紺まくはり

一 雪隠五軒仕切式ヶ所四軒仕切壺ヶ所式軒仕切壺ヶ所立同見隠所々蔭圍

一 釜や壺間半二式間壺ヶ所建

一 庫裏之内料理所ニ補理飯いろ里付其外所々竹縁取付

一 表門番所壺ヶ所立

### 下官宿

### 明性寺

一 本堂仏前唐紙ニ而仕切壺分紺幕張り同所々ニ釜懸竹取付青苧縄付同所かや釣り手横竹所々打同縁主通り飯敷かもひ人明もうし立

一 同所南之方ニ湯殿壺間半ニ四間半同五軒



一 夢は夢に非ざるを以て是は強て強ては夢に非ざるを以て是は  
一 夢は夢に非ざるを以て是は強て強ては夢に非ざるを以て是は  
一 夢は夢に非ざるを以て是は強て強ては夢に非ざるを以て是は  
一 夢は夢に非ざるを以て是は強て強ては夢に非ざるを以て是は

夢人夢人夢人  
運轉する

一 夢は夢に非ざるを以て是は強て強ては夢に非ざるを以て是は  
一 夢は夢に非ざるを以て是は強て強ては夢に非ざるを以て是は  
一 夢は夢に非ざるを以て是は強て強ては夢に非ざるを以て是は  
一 夢は夢に非ざるを以て是は強て強ては夢に非ざるを以て是は

雪隠四ヶ所ニ立所々見隠蔭垣御幕囲ひ仕

一 釜や式間二三間同表門裏門ニ番所壺ヶ所宛立

一 庫裏之内料理所ニ補理飯いろ里付其外竹縁付

一 表門裏門共屋年取放し柵門ニ仕申候

官人荷物宿

蓮華寺

一 荷物置所飯や三間梁ニ桁行九間半

壺ヶ所三間梁ニ六間壺ヶ所前庇付出致し  
間中ニ折廻し拾間付同統飯雪隠式間仕切  
四間仕切共立同竹えん付

一 座敷南之方ニ湯殿壺間半ニ式間半同統式軒  
雪隠建

一 釜や壺間半ニ式間壺ヶ所立

一 庫裏之内料理所ニ補理竹縁付

一 吾の書は仙書と云ふ所は其の意を以て  
其の書は仙書と云ふ所は其の意を以て  
其の書は仙書と云ふ所は其の意を以て

長生記

仁國

一 吾の書は仙書と云ふ所は其の意を以て

其の書は仙書と云ふ所は其の意を以て

其の書は仙書と云ふ所は其の意を以て

長生記

一 吾の書は仙書と云ふ所は其の意を以て

通和記

仁國

一 表門裏門仮番所迄ヶ所建表門屋年  
取放し裏門ハ柵門ニ仕其外所々見隠蔭垣

一 座敷之内ニ釜懸竹取付青苧縄かや釣り  
手所々横竹取付

長老宿

江国寺

一 座敷前湯殿立雪隠緒同門際ニ番所  
迄ヶ所建其外所々蔭かこひ竹縁付

一 本堂前庫裏より裏門者蔭垣

長老宿

下宿

善照寺

松原庄右衛門

一 上湯殿雪隠有物用ひ中通り湯殿雪隠立

通詞下知役宿

上魚や町  
同町  
八右衛門  
久左衛門



通詞宿

白壁町  
同町  
紺屋町  
元川町  
上魚屋町  
職人町  
下魚屋町  
本町

願通寺  
法藏寺  
理応院  
源右衛門  
伝次  
伝介  
弥次兵衛  
九兵衛  
伝兵衛  
角田半四郎  
磯部三郎兵衛

宗對馬島征伐七陣

秋風集

[illegible][illegible]

吳昌碩

右湯殿雪隠建但有物能半分用ひ繕

宗対馬守様御本陣

林吉兵衛

一 同所路地以内ニ中門建北隣町や之内式間ニ八間  
御槍之間ニ補理同所參墮子之間北輪ニ玄関  
飯式台取付御書院床ニ申懸板台所土間之  
内飯床仕溜り之間ニ補理同南隣町や式軒  
一所ニ仕込御繕所御料理之間下台所同統  
東両や之内御荷物置所御馬通し道ニ所々  
住居替湯殿雪隠立

一 七疋立御馬や同所三疋立外懸同釜や沓間  
半ニ三間ニ建同御馬取居所沓間ニ沓間半  
付出致し候

一 五ヶ所 同所飯番所



月川氏

新嘉坡河口月川氏建

在在

新嘉坡河口月川氏建

在在

新嘉坡河口月川氏建

在在

新嘉坡河口月川氏建

一頁

新嘉坡河口月川氏建

新嘉坡河口月川氏建

一頁

新嘉坡河口月川氏建

月川氏

在在

在在

内式ヶ所 表路頭門内外二建

壹ヶ所 表南之端台所口立

壹ヶ所 馬通し之道二立

壹ヶ所 土蔵之脇二立

一 百式拾六軒 町方惣下宿数

但湯殿雪隠有物繕用ひ無之所ハ

掛拵所々 飯馬や立槍懸御取付

一 五拾壹ヶ所 対馬守様御乗馬御家中馬共

飯馬や外装とも但笠木竹

内式ヶ所三疋立

九ヶ所式疋立

四拾ヶ所壹疋立

一 八新 江代官家なる名りし江代名者

此江代名者江代名なりし江代名者  
此江代名者江代名なりし江代名者

一 江新 江代官家なる名りし江代名者

此江代名者江代名なりし江代名者  
此江代名者江代名なりし江代名者

一 江新 江代官家なる名りし江代名者

此江代名者江代名なりし江代名者  
此江代名者江代名なりし江代名者

此江代名者江代名なりし江代名者  
此江代名者江代名なりし江代名者

一 八軒 御代官衆御宿同手代宿共  
但湯殿雪隠有物用ひ無之分ハ新ニ建刀懸一ツ宛  
御代官宿付槍懸とも付

一 式軒与力衆宿  
但右同段飯馬やとも建同槍懸取付

一 四軒御使者宿  
内式軒 川原町  
式軒 彦根町

但湯殿雪隠飯馬やとも建同槍懸共付

朝鮮人通道筋所々御高札場御門番所  
宿々御本陣向や摺針茶や破損御繕  
善利川橋天満橋丹生川橋共懸替  
並町方辻々見隠薩囲ひ等打ツ

一 在知川河橋中いりては、ちういすはるまは  
 ちういすはるまは、河橋いりては、ちういすはるま  
 二 ちういすはるまは、河橋いりては、ちういすはるま  
 三 ちういすはるまは、河橋いりては、ちういすはるま  
 四 ちういすはるまは、河橋いりては、ちういすはるま  
 五 ちういすはるまは、河橋いりては、ちういすはるま  
 六 ちういすはるまは、河橋いりては、ちういすはるま  
 七 ちういすはるまは、河橋いりては、ちういすはるま  
 八 ちういすはるまは、河橋いりては、ちういすはるま  
 九 ちういすはるまは、河橋いりては、ちういすはるま  
 十 ちういすはるまは、河橋いりては、ちういすはるま

一 愛知川御飯橋巾式間半ニ長さ式ケ所ニ而五拾  
七間宇尾川御飯橋巾式間半ニ長さケ所ニ而  
四拾間半ニ懸申し候

一 三ヶ所 五軒続飯雪隠

内壺ヶ所 えち川立

壺ヶ所 う尾川立

壺ヶ所 丹生川立

一 山崎南町村御茶や式間梁ニ桁行拾間  
半前輪間中ニ拾間半底付同式軒雪  
隠三軒雪隠建

一 同所番所壺ヶ所壺間ニ式間建前へ  
通より其外所々蔭垣仕

一 六ツ 三使上々官冠台  
但角田順了渡し



一 八ツ 丸てうちん

但平田村後三条村出口ニ四ツ宛翌朝

猿ヶ瀬口御番所近所縄手の内同坂下ニ

右同段ニ焼申し候

一 宗安寺表門高宮口切通口本町口油懸口

御番所前御雁色槍拾三本立並御番頭

為槍立とも取付

一 御弓鉄炮台五ヶ所之御番所へ相渡申し候

但高宮口切通口宗安寺表門御番所ハ

御弓御鉄炮拾挺立油懸口本町口御番所

右同段五挺立

一 三ヶ所 寄馬通し道柵門建

内壺ヶ所 内大工町南之辻

壺ヶ所 川手四方面御屋敷前

壺ヶ所 高野瀬兵右衛門屋敷前





一 拾五地溜桶

内式ツ 宗安寺本堂前兩脇但飾手桶とも

壹ツ 同所台所脇釜や

貳ツ 三使飯台所前

叁ツ 同所釜や前

肆ツ 御勘定所釜や

伍ツ 大信寺本堂前並釜や

陸ツ 明性寺右同段

柒ツ 蓮花寺右同段

捌ツ 林吉兵衛所釜や

玖ツ 同所中之口前飾手桶とも

一 八枚 朝鮮人宿印道印立札 式尺六寸 六寸五分

内式枚 宿印立札宗安寺表門

壹枚 同大信寺右同段

貳枚 同明性寺右同段

叁枚 同蓮花寺右同段

三  
十  
九

壹枚 大信寺道印立札本町筋中之西左の辻  
貳枚 明性寺道右同段  
同壹枚 本町御高札所脇  
壹枚 同町堀田専深庵東之辻  
但立札御作事方ニ而拵御普請方へ相渡申し候

右者寛延元辰年朝鮮人来聘御馳走  
御用ニ付御作事方御修覆仕様萬書記  
奉渡上候以上

巳

十一月

實

一、推廣七名醫

正書堂藏

一、音義

一、少壯者多

一石修志

一、以...  
...  
...  
...  
...

一七

[illegible]

覚

一 貳拾壹貫七百五拾四匁九分

宗安寺御勘定所御破損繕  
飯や打立並所々補理申  
御入用材木瓦大工木引  
屋年簀御扶持方御作料銀  
諸色代銀

一 貳貫七百貳拾四匁貳分

大信寺右同段

一 貳貫三百三拾九匁壹分

明性寺右同段

一 貳貫四百貳拾八匁四分

蓮花寺右同段

一 五百八拾六匁五分

江国寺善照寺

松原庄右衛門右同段

一 貳貫百五拾八匁五分

通詞宿拾三軒右同段

一 七貫四百六匁九分

林吉兵衛所右同段

一 寶仙館主

一 玉仙館主

一 玉仙館主

一 玉仙館主

一 玉仙館主

此等書中名仙何人  
 事蹟之可述者不  
 多而此等書中  
 所載之仙名  
 亦多而此等書  
 中名仙何人  
 事蹟之可述者  
 不而此等書中  
 所載之仙名亦  
 多而此等書中  
 名仙何人

一 五貫八百三拾七匁一分

町方惣下宿飯湯殿  
雪隠馬や新建其外  
所々補理並辻々見隠  
蔭かこひ柵門共右同段

一 壹貫四拾貳匁八分

山崎南町村御飯茶や同段

一 貳拾貫九百八拾五匁四分

善利川橋天満橋  
丹生川橋とも懸替  
右同段

一 七貫七百七拾五匁七分

愛知川宇尾川共飯橋  
並飯雪隠丹生川飯  
雪隠とも右同段

一 壹貫四百貳拾六匁五分

番場宿鳥居本宿  
御本陣向や並御高札所  
摺針茶や共右同段



一、

考名類

金瓶梅詞話卷之八

文方指身

上卷

[illegible]

一 貳貫七拾七匁

萬小細工御用ニ使申し候諸  
御材木並御絵図仕立  
申大工御扶持方御作料銀  
とも諸色代銀

一 壹貫三百三拾二匁四分

本町口御門櫓御勘定所ニ  
補理並御馬や之内御筋方  
御證判方会所ニ補理  
中敷口御門外生須善利  
川口御番所猿ヶ瀬御番  
所繕

合七拾九貫八百七拾六匁四分  
内

五貫貳拾匁四分

朝鮮人御馳走所立帰り  
古物御拂代銀御金方へ  
上納仕候

江蘇省立第一中學

一掃而空

川省優待

美

一、精實之志

一、實心、

一、貴客光臨

一六五

一古石

一、五、八、四、二

以我為羞耻

建國後

仙橋野史

歷代名賢集

丁巳仲夏

مجلس شورای ملی

引残而七拾四貫八百五拾六匁

一 拾七貫三百五拾五匁八分

諸色手伝ニ使申  
同雇賃米代銀

覚

一 貳拾三貫三百匁七分

御材木御買上代銀

一 貳貫八百三拾匁

建物町渡代銀

一 四貫貳百六拾七匁

飯橋町渡代銀

一 六百三匁七分

瓦御買上代銀

一 六百五拾六匁壹分

壁方町渡代銀

一 三百貳拾八匁貳分

竹竿代銀



一 貳拾壹貫七百貳拾壹匁七分 大工木挽屋年葺御作料銀

一 貳拾六貫百四拾貳匁 右同段御扶持方米代

一 貳拾七匁 藁や年葺賃米代銀

メ七拾九貫八百七拾六匁四分  
右之通入用仕分

中官六拾五人宿 来迎寺萬御入用大積

一 三百拾八匁 銀子

右表塀腕木門二仕申御入用

同百壹匁 柵門二仕候へハ下置被成申し候

一 三百拾匁 銀子

右同表輪塀貳拾貳間半桁取かへ片板二而

葺直候ハハおふち上様取替申候共萬御入用

八百五

學

天長地久

卷四

移

[illegible]

卷五

五

右年餘滑石膏天麻接骨散

吾自

五

何如天下何如

長江無盡水

香齋

96

何れも之を以て道と爲る

一 八百四拾匁 銀子  
右本堂之内天井四拾坪張申萬御入用

一 貳百匁 銀子  
右同段内陣廻り囲申萬御入用

一 貳百三拾八匁 銀子  
右書院次之間共天井拾四坪張申御入用

一 壹貫百匁 銀子  
右本堂より付出致し湯殿壺間半二六間  
壺ヶ所立申萬御入用

一 三百三拾匁 銀子  
右釜や三間二貳間壺ヶ所建申御入用



一 百五十五

形子

右音形や座を台に書きたるを  
東にまゐり用

一 百五十六

形子

右大形を座を台に書きたるを  
東にまゐり用

一 百五十七

形子

右小形を台に書きたるを  
東にまゐり用

一 百五十八

形子

右信を台に書きたるを  
東にまゐり用

形子

一 百六拾五匁 銀子  
右者部や底壺間ニ式間半ニ壺ヶ所  
建申萬御入用

一 六百目 銀子  
右六軒雪隠壺ヶ所式軒雪隠式ヶ所  
とも建申萬御入用

一 百匁 銀子  
右仮番所式ヶ所建申萬御入用

一 八百拾匁 銀子  
右信心院玉城院廻向院三ヶ所座敷前ニ  
湯殿雪隠建申萬御入用

銀メ五貫三匁

中庭より西へ入る大儀を以て用ひ

一 若くは西へ入る大儀を以て用ひ

一 若くは西へ入る大儀を以て用ひ

一 若くは西へ入る大儀を以て用ひ

一 若くは西へ入る大儀を以て用ひ

一 若くは西へ入る大儀を以て用ひ

一 若くは西へ入る大儀を以て用ひ

一 若くは西へ入る大儀を以て用ひ

中官六拾五人宿

大信寺萬御入用大積

一 四百貳拾三匁

銀子

右表堀腕木門ニ仕申萬御入用  
内百三拾四匁三分柵門ニ仕候へハ下置被成申し候

一 壹貫八拾壹匁五分

銀子

右本堂之内天井五拾壹坪半張申御入用

一 貳百匁

銀子

右内陣廻り囲申御入用

一 三百六匁

銀子

右書院次之間共天井八坪張申御入用

一 壹貫四百三拾匁

銀子

何れも金や銀の如きものこそは建  
物とて守るべきものなり

一、金

金子

金は其の源をたれば其の源をたれば  
いふ事多しをたれば其の源をたれば

一、銀

銀子

銀は其の源をたれば其の源をたれば  
いふ事多しをたれば其の源をたれば

一、銅

銅子

銅は其の源をたれば其の源をたれば  
いふ事多しをたれば其の源をたれば

銅は其の源をたれば其の源をたれば  
いふ事多しをたれば其の源をたれば

銅は其の源をたれば其の源をたれば  
いふ事多しをたれば其の源をたれば

右湯釜や式間二三間壺ヶ所建来  
湯殿壺間半二六間新二建申御入用

一 六百匁

銀子

右六軒雪隠壺ヶ所四軒雪隠壺ヶ所  
式軒雪隠壺ヶ所共建申御入用

一 百匁

銀子

右仮番所式ヶ所建申御入用

一 四百五拾式匁

銀子

右清寿庵聖迎庵式ヶ所座敷前二  
湯殿雪隠建申御入用

銀又四貫五百九拾式匁五分

96

[illegible]

一  
官

張

不勝其苦  
 黃竹家  
 幸甚幸甚  
 也  
 自是故  
 黃竹家  
 幸甚幸甚  
 也  
 自是故

一千九百零九年

9/13

有日廣町家若き志士ハ留るべし大留  
そしけ共々ハ留るべし大留

林吉兵衛所住居置申萬御入用大積

一 壺貫八百三十拾匁 銀子

右同所上湯殿壺間半二式間壺ヶ所建繼  
同統雪隠住居置屋年柿葺新二葺置  
同通道摺縁新二仕替同所台所六間  
床仕足表入口柱切覆指物入槍懸仕申共  
御入用

一 四百五十拾匁 銀子

右林吉兵衛之統町家幸兵衛所式間半板  
敷仕直し入口明ヶ槍かけ仕裏之方二庇竹  
縁新二付所々蔭かこひ仕申共萬御入用

一 壺貫五百五十拾匁 銀子

右同統町家光兵衛所四間半二九間  
壺ヶ所並借屋四間二八間壺ヶ所台所





同荷物置所ニ住居置板敷張上候庇竹縁  
付馬通し道明ヶ所々蔭垣仕申共萬御入用

一 四百六拾匁

銀子

右同所釜や貳間梁ニ三間壺ヶ所同縁ノ下  
湯殿壺間ニ貳間壺ヶ所共立申萬御入用

一 三百三拾匁

銀子

右同所馬取居所壺間ニ壺間半ニ壺ヶ所  
同飯番所三ヶ所共立申御入用

一 八百目

銀子

右同所七足立馬や貳間梁ニ七間一ヶ所  
同五足立外繫壺ヶ所共新ニ立申御入用

一 百五拾匁

銀子

右同所下三軒雪隠壺ヶ所同貳軒  
雪隠壺ヶ所共立申萬御入用

一 入石  
如見者  
常中  
た六  
子

下  
一  
二  
三  
四

一  
二  
三  
四

一 五百匁

銀子

右同所吉兵衛同統太兵衛彦兵衛所共住居  
替申共御用相濟申後元之通ニ仕直申共  
御入用

×六貫七拾匁

下官百人御馳走所 明性寺萬御入用大積

一 六百匁

明性寺本堂南輪より付落忒間半ニ  
五間惣湯殿新ニ建申萬御入用積

一 三百六拾匁

同所釜や忒間ニ三間新ニ建  
申萬御入用積り

一 七百五拾匁

同所五軒雪隱忒ヶ所台所者忒  
間五軒雪隱忒ヶ所新建申  
御入用

一 各月

右は庫裏より伝来する御書

一 石目

右は石目伝来の御書

一 名目

右は名目伝来の御書

一 石目

右は石目伝来の御書

一 名目

右は名目伝来の御書

一 石目

右は石目伝来の御書

一 五百目

右同所庫裏所々住居替繕竹縁付  
申共萬御入用

一 貳百目

右同所内陣廻り囲申萬御入用

一 九百目

右同所表門より裏門右へ折廻し同  
裏門より本堂へ折廻し三方書院廻  
折廻三方共二八拾五間其外所々  
見隠とも長々蔭垣仕同裏表  
門脇番所貳ヶ所建申萬御入用

銀×三貫三百拾匁

長老宿

法蔵寺萬御入用大積

一 貳百八拾匁

法蔵寺上湯殿雪隠壺間二  
貳間二新二建申萬御入用

一 貳百五拾匁

同所中通湯殿壺ヶ所同雪隠  
貳間続壺ヶ所新二建申御入用

一 三言

日石やそは仙種を因りて  
唐書よりいふに  
白くまじりのみ

一 百言

日石の如き書はそは下  
いふ多き書はそは下  
日石の如き書はそは下

新ノ九言

下官 雲人 石 歌 遊 書 美 分 類

一 三言

日石の如き書はそは下  
いふ多き書はそは下  
日石の如き書はそは下

一 百言

日石の如き書はそは下  
いふ多き書はそは下  
日石の如き書はそは下

一 三百匁

同所本堂仏壇前囲座敷  
庫裏とも所々住居替繕竹縁  
付申とも御入用

一 百三拾匁

同所門脇番所老ヶ所下  
式軒雪隠老ヶ所新二建  
同見隠之蔭垣仕申御入用

銀又九百六拾匁

下官四拾人宿 願通寺萬御入用大積

一 三百六拾匁

願通寺湯殿老間半二三間  
新二建申萬御入用

一 百九拾匁

同所釜や老間半二式間  
新二建申萬御入用



一音之聲

三

一百五

張子真之書

此乃不刊之論

吾思子美所為大矣

日心而動。不遠千里。以爲  
天下。皆吾人也。吾人皆  
事。吾人皆事。

日本に於ては、國體の尊嚴を  
 守るに、臣民の忠節を重んずる  
 こと、最も要する所なり。

[illegible]

一 三百六拾匁

同所五軒雪隠壺ヶ所台所  
前下式間雪隠壺ヶ所共新二  
建申萬御入用

一 三百目

同所仏壇前囲座敷庫裏  
とも所々住居替繕竹縁付申  
共萬御入用

一 百貳拾匁

同所座敷前分之蔭垣並  
表門脇番所壺ヶ所共新建  
申御入用

銀メ壺貢三百三拾匁

献上御馬附衆御馳走所其部下官  
四拾人御馳走所

善照寺萬御入用大積



一 式百拾匁

善照寺座敷前上湯殿雪隠  
新二建同通り道竹縁付申とも  
萬御入用

一 三百六拾匁

同所下官湯殿沓間二三間新二  
建申御入用

一 七百五拾匁

同所庫裏式間半梁桁行  
沓間半新二建繕申御入用

一 百五拾匁

同所表長や之内ヲ沓間半二  
式間釜や囲同長屋之内  
番所沓ヶ所囲申共御入用

一 式百七拾匁

同所式軒雪隠式ヶ所同下  
式軒雪隠沓ヶ所新二建申  
とも御入用

一云

月心仙體云のこひたふ  
事なき月恒たふと伝ふ  
諸竹所存と云ふあり

永山黄白子

一 三百匁

同所仏壇前かこひ座敷  
庫裏共内住居所々仕替  
繕竹縁付申共御入用

銀又貳貫百拾匁